

[その他]

内と外に「開かれた学校づくり」を目指した教育目標の改定

-ひとりでみんなと さらに - 自立 共生 挑戦 -

阿部 正廣*

1 はじめに

(1) 教育目標の現状

平成20年度より新潟県が本格実施する教員評価制度では、教育目標に対する各教師の自己目標の設定と自己評価がなされ、それを校長、教頭が評価する。これを実施するためには、教育目標に対する教師の構えや教育目標と各種教育活動との関係が大変重要となってくる。

奥田(1994)は、教育課程審議会の文部大臣への答申をもとに、教育目標を設定するに当たって重要な4項目について述べている。「①豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図る。②自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する。③国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図る。④国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視する。」こととしている。

また、奥田は、教育目標の要件として、「①法律に定められた学校教育の目的や目標の達成を前提とする。②学習指導要領に示す各教科、道徳及び特別活動の目標を含むものとする。③教育委員会の規則・方針にそったものである。④地域の学校の実態等に即した独自性をもっているものである。⑤校長はじめ全教職員、保護者、児童生徒の願いが生かされている。⑥知・情・意・体の教育的価値が高く、持久性を兼ね備えている。⑦児童生徒の行動の基準となりうるような具体性をもっている。」ことを挙げている。

教育目標の重要性について示したが、黒沢(1976)は、現実には、「①目標が抽象的、一般的で明確性を欠く。②目標設定や認知について、(児童、教師、保護者が)消極的である。③目標が実践に結びつきにくい」等の問題を指摘している。教育目標は、その具現化を図る教育活動とのつながりや見直しが適切に行われているとは言えないのが現状である。

(2) 当校の教育目標

平成16年4月、赴任した1年目の教育目標は、「あかるく かしこく たくましく」であった。13年間、当校の教育を支えてきた伝統ある目標ではあるが、個に焦点を当てた目標という印象であった。個と集団に焦点を当てた目標にしたいというのが、改定のきっかけであった。

教育目標の改定を学校経営の一つとして、企画委員会に提案した。その目的は、奥田が示す「②自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する。」とともに、要件の中の「⑤校長はじめ全教職員、保護者、児童生徒の願いが生かされている。⑦児童生徒の行動の基準となりうるような具体性をもっている。」ことを重視したいと考えた。

さらに、新しい教育目標は、学習指導はもとより、生徒指導等の各種教育を含むすべての教育活動を教育目標と結び付けることにより、学習する児童、指導する教師の意識が一つになるものにしたい。また、保護者、地域に学校教育の方針を分かりやすい言葉で示し、伝えていくことにより、保護者、地域が認知しやすいものにしたい。新しく設定する教育目標は、内(児童・教師)と外(保護者・地域)に開かれた学校づくりに寄与するものにしたいと考えた。

2 研究の目的

教育目標は、児童に分かりやすく、目標を意識することによって活動意欲が高まること、教師が受け入れやすく、教育活動と結び付けることによって教育の充実が図られること、保護者や地域にも親しみやすく、目標を共有することによって家庭教育にも生かされることが重要である。

教育目標が、内(児童・教師)と外(保護者・地域)に開かれた学校づくりに寄与するために、教育目標改定の在

* 魚沼市立広神西小学校

り方を創意工夫し、実践し、評価し、改善を行う。その成果を検証、考察することを研究の目的とする。

3 研究の内容と方法

教育目標が、内と外に開かれた学校づくりに寄与するために、教育目標改定の観点を下記のように設定した。

- (1) 教育目標を、関連する目標とリンクさせて、機能的なものにしていく。
- (2) 教育目標を、各種教育活動とリンクさせて、具体的、実践的なものにしていく。
- (3) 教育目標を、自分のこととして、全教師がかかわるものにしていく。
- (4) 教育目標を、広報活動を工夫して、保護者、地域が広く認知できるものにしていく。

これらの観点について、教育目標の改定、新しい教育目標を柱とするグランドデザインの作成、教育活動の実践、学校評価アンケートや教育目標そのものについてのアンケート結果をもとに、その成果を検証、考察する。

4 実践

○ 教育目標の改定

教育目標改定を進めるに当たって、職員会議において教育目標の改定計画を示し、共通理解を図った。

① 教育目標改定のねらい

- ・個に応じた教育目標から、個と集団に応じた目標、さらに個と集団がレベルアップを目指す目標とする。
- ・教育目標と学年の目標、教科・各種教育等の目標との綿密な関連を図る。
- ・教育目標と学校、学年、学級の教育活動との密接な関連を図る。
- ・町村合併による新市誕生（広神村→魚沼市）、新しい校名（西小→広神西小）誕生を機会に、新しい教育目標のもとで教育活動を推進する。

② 教育目標改定の手順

- ・校長提案〈企画委員会〉 平成16年9月
- ・改定計画について確認〈職員会議〉 11月
- ・教師、保護者アンケートの実施〈企画委員会〉 12月
- ・アンケートの集約と目標（案）の提示〈企画委員会〉 平成17年1月
- ・新教育目標の決定〈職員会議〉 1月
- ・新教育目標を生かした教育計画の策定〈教育計画プロジェクトチーム〉 2月
- ・全校朝会で、新教育目標を児童に説明〈校長〉 3月
- ・PTA役員会で、新教育目標の説明、啓発〈校長〉 3月
- ・学校評議員会で、新教育目標の説明、啓発〈校長〉 3月
- ・平成17年度グランドデザイン「ロンランプラン2005」の作成〈教育計画プロジェクトチーム〉 4月
- ・学校だより「さんさん」で、新教育目標の紹介、啓発〈校長〉 4月
- ・PTA総会で、新教育目標の説明、啓発〈校長〉 4月

③ 教師アンケート項目

- ・「個」に注目し、児童一人一人を伸ばす目標で、「知育」にも対応する教育目標にふさわしい言葉は何か。
- ・「集団」や人間関係づくりに注目し、思いやりの心や態度を育成する目標で、「徳育」にも対応するふさわしい言葉は何か。
- ・「個と集団のレベルアップ」に注目し、挑戦する心や全体の高まりを目指す目標で、「体育」にも対応するふさわしい言葉は何か。

④ 保護者アンケート項目

- ・広神西小の子どもたちにもっと頑張してほしいことは何か。
- ・子どもたちに付けてほしい力は何か。
- ・教育目標にふさわしい言葉は何か。

教師アンケート、保護者アンケートをもとに、新しい教育目標を決定する。

ひとりで	みんなと	さらに	(児童, 保護者, 地域版)
— 自立	共生	挑戦 —	(教師版)

教師アンケートでは、「個」に対応した言葉として、『自ら考える子』、『自立する子』、『学習する子』などが挙げられた。「集団」に対応した言葉として、『協力する子』、『助け合う子』などが挙げられた。さらに、「個と集団のレベルアップ」に対応した言葉として、『高まる子』、『向上する子』、『頑張る子』などが挙げられた。

保護者アンケートでは、広神西小の子どもたちにもっと頑張してほしいこととして、『自発性』、『思いやりの心』、『チャレンジ精神』などが挙げられた。また、子どもたちに付けてほしい力は何かに対しては、『自立心』、『思いやりの心』、『チャレンジ精神』などが挙げられた。また、教育目標にふさわしい言葉は何かに対して、『自立 思いやり 向上』、『明朗 融和 飛躍』などが挙げられた。

「ひとりで みんなと さらに―自立 共生 挑戦―」は、筆者が腹案として考えていた。教育目標改定の基準として、個と集団に応じた目標、さらに個と集団がレベルアップを目指す目標にすることを望んでいた。教師アンケート、保護者アンケートを集約した結果、「自立 共生 挑戦」に結び付く言葉が多く挙がった。やはり、「自立 共生 挑戦」がふさわしいと確信した。そこで、児童に分かりやすく、保護者、地域にも親しみやすい言葉として、児童、保護者、地域版「ひとりで みんなと さらに」を、教師が教育活動を推進する上で、それを焦点化、明確化した言葉として、教師版「自立 共生 挑戦」を職員会議に提案し、決定した。以上、16年度末の教育目標の改定について述べた。以下、17年度、18年度の実践について述べる。

(1) 教育目標と関連する目標とのリンク

教育目標を、関連する目標とリンクさせて目標達成を機能的なものにしたいと考えた。まず、年度の重点目標を教育目標とリンクさせ、下記のように設定した。重点目標は、教育目標を受け、目指す子ども像を具体的に表したものである。

◎ 平成18年度の重点目標	(自立) 自ら学び、自分の考えのもてる子 (共生) 相手を大切にし、かかわり合う子 (挑戦) めあてに向かい、チャレンジする子
---------------	---

次に、重点目標達成の視点を下記のように設定した。この視点は、教育目標を各種教育活動とリンクさせるための媒体となるものである。重点目標を焦点化したもので、教育活動を進める上で重要なものと位置付けている。

○ 重点目標達成の視点	(自立) 一人一人の学力の保障 (共生) 人とかかわりの育成 (挑戦) チャレンジ精神の高揚
-------------	--

重点目標達成の3視点に、教育目標とは直接かかわりはないが地域に視点を当てた「(地域)地域の教育力との連携」を加えた4視点に、具体的な教育活動の目標を4項目ずつ策定した。それぞれの目標は、学校の教育課題、児童の実態、保護者、地域の要望から引き出したものであり、児童に付けさせたい力である。それぞれに、目標とする成果を数値で示した。

重点目標達成の視点	目標とする成果
○ (自立) 一人一人の学力の保障 ・基礎・基本の定着 ・一人一人が考える授業の充実 ・読書活動の充実 ・英語活動の充実	・学力テストで全国平均を上回る ・自分なりの考えをもった児童 90%以上 ・自分のめあてを達成できた児童 70%以上 ・楽しんで活動できた児童 70%以上
○ (共生) 人とかかわりの育成 ・あいさつ運動の推進 ・あおぞら(縦割り)班活動の充実 ・委員会活動・係活動の充実 ・学級人間関係調査の実施と分析	・自分からする児童 70%、返す児童 90%以上 ・自分の役割を果たした児童 80%以上 ・自分の役割を果たした児童 80%以上 ・学級生活に満足している児童 80%以上
○ (挑戦) チャレンジ精神の高揚 ・ロンランマラソン・大縄跳びへの挑戦 ・新スポーツテストの実施と分析 ・学習カードの活用 ・発表朝会への取組	・記録を更新した児童 70%以上 ・伸びが確認できた児童 80%以上 ・学習の仕方が向上した児童 80%以上 ・自分の思い考えを伝えられる児童 80%以上
○ (地域) 地域の教育力との連携 (省略)	

次に、各教科、各種教育の年度の指導の重点(目標)を、「自立 共生 挑戦」の視点で示すようにした。この重点に対して、各学年、学級で実践に取り組み、その年度の終わりに評価項目を設定し、学校評価を行っている。例えば、

○ 教科 ―国語― (自立) 主体的に考える力を育てる。 (共生) 相手の考えを受け止め、自分の考えと比べたり、質問したり、感想をもったりして、伝え合う力を育てる。 (挑戦) 場に応じた表現の仕方を工夫して、伝え合う力を育てる。

○ 各種教育 ―生徒指導― (自立) 自己決定の場や機会を設け、個々の可能性を引き出せるように努めるとともに、トラブルを自己解決できるように支援する。 (共生) 挨拶週間などを通して、自分から進んで挨拶していくように支援するとともに、明るい人間関係を築けるように支援する。
--

(挑戦) 自己評価カードを利用し、伸びを確認するとともに、自分をさらに伸ばすために次のめあてに向かえるように支援する。

(2) 教育目標と各種教育活動とのリンク

① 平成18年度グランドデザイン「ロンランプラン2006」の作成

「ロンランプラン2006」は、中心に教育目標「ひとりで みんなと さらに一自立 共生 挑戦」を示し、その周りに重点目標達成の視点と目標とする成果を、「自立 共生 挑戦 地域」ごとに4項目ずつ16項目そのまま載せている。18年度、全学年、全学級で重点的に取り組む教育活動が、児童、教師、保護者、地域の方に一目で分かるようにデザインした。

② 学年経営の実践

学年経営案は、グランドデザインを生かし、学年版「ロンランプラン2006」を策定し、実践に取り組んでいる。3学年では、学年目標を「〈ひとりで〉よく聞き、しっかり考え 〈みんなと〉 みんなと仲よく協力して 〈さらに〉 どんどんチャレンジ3年生」としている。グランドデザインが、「読書活動、英語活動に充実感をもてる児童70%以上」を目指しているのに対して、3学年は、「80%以上」としている。グランドデザインをもとに学年独自の数値を設定し、実践に取り組んでいる。

③ 各種起案の実践

職員会議では、様々な起案が各主任から提案される。どの起案も、教育目標の実現を目指し、必ず「ねらい」を「自立 共生 挑戦」の視点で示している。その後、各学級で起案に沿った指導を行うことによって、歩調をそろえて目指す児童の姿に迫ることができる。6月の「保健指導実施計画」の起案は、重点目標が「歯や歯肉の健康を守ろう」であった。ねらいを、「(自立) 自分から進んで丁寧に歯をみがく子ども、(共生) よい歯の磨き方を学び合う子ども、(挑戦) 自分の歯に合った歯磨きの仕方を工夫する子ども」とし、全校一斉に取り組んだ。

④ 教育活動の評価

学期末に児童、保護者、教師からアンケートを取り、学校評価を行っている。結果は、学校だよりで保護者に示すとともに、学校評議員にも資料を提示し、意見を聞いている。

評価項目は、グランドデザインと対応しており、重点的に取り組む教育活動16項目とリンクしている。そのため、保護者、教師、児童とも同じ内容での評価が可能であり、アンケート項目を考えるなどの手間が省ける。結果は、どの項目もA(とてもよい)、B(だいたいよい)に高い数値が見られ、概ねよい評価を得ている。例えば、

みんなと 一共生一 (自立、挑戦は略)			A	B	C	D
1	自分から挨拶したり、挨拶されたら返したりしていますか。 (自分からあいさつしていますか)	P	34	49	16	1
		T	20	73	7	0
		C	42	35	14	9
2	友だちと仲よくしたり、縦割班で協力したりしていますか。 (青空班活動では進んで活動していますか)	P	46	50	4	0
		T	33	67	0	0
		C	52	33	12	3
3	係や委員会の仕事で、自分の役割を果たそうとがんばっていますか。 (係や委員会の仕事をきちんとしていますか)	P	51	41	7	1
		T	13	67	20	0
		C	52	33	12	2
4	自分の学級での生活に満足していますか。 (クラスみんなと仲よく力を合わせてがんばりましたか)	P	50	43	5	1
		T	7	73	13	0
		C	56	35	6	2

〈平成18年度1学期〉 A(とてもよい) B(だいたいよい) C(あまりよくない) D(よくない) P(保護者) T(教師) C(児童) 数値(%)

表1 児童、保護者、教師の教育活動評価

⑤ 児童の活動意欲の向上

平成17年3月の全校集会で、4月から教育目標が変わることを児童に説明した。「みなさん、『ひとりで みんなと さらに』の後に、『がんばろう』を付けてみましょう。まず、『ひとりでがんばろう』、次に『みんなとがんばろう』、最後に『さらにがんばろう』です。何をがんばるかは、その時々、ひとりで、みんなと考えてください。」という話をした。

5月の運動会で、「徒競走は『ひとりで』、応援合戦は『みんなと』、リレーは優勝目指して『さらに』がんばろう。」と激励した。校長の講話や学級担任の指導の中で、目の前の学習や活動を通して、「ひとりで みんなと さらに」のどれを目標に頑張ればよいのかを意識させることによって、活動意欲を高めるようにしている。

(3) 教育目標と全教師のかかわり

平成16年度末の教育目標改定に当たっては、校長がリーダーシップを取り、企画委員会で案を策定し、職員会議で決定してきた。この段階までは、教師の教育目標改定への意識はそれほど高くなかった。校長の提案に協力するレベルであった。そこで、目標が目標で終わることのないよう教育活動とリンクさせたい旨を職員会議で強調した。その後、重点目標達成の視点ごとに具体的な教育活動と目標とする成果の数値を策定するプロジェクトチームを組織した。この過程の中で、教育目標改定への気運が教師の中に徐々に高まっていった。児童と日々接している教師は児童の実態から、学校経営を担う筆者は学校の教育課題から、どんな教育活動を仕組めばよいのかを議論した。そうした経緯が、18年度の教師の評価に現れている。

教師の評価	A	B	C	D
○ 教育目標「ひとりで みんなと さらに」を知っていますか。	93	7	0	0
○ 「ひとりで みんなと さらに」はよいと思いますか。	53	40	0	7
○ 「ひとりで みんなと さらに」が、子どもの姿に現れていますか。	7	73	20	0

〈平成18年度1学期〉 A (とても) B (だいたい) C (あまり) D (よくない) 数値〈%〉

表2 教師の教育目標評価

(4) 教育目標と保護者、地域の認知

平成17年4月、「ロンランプラン2005」をカラー刷りリーフレットにし、初めて保護者に配布、地域には回覧した。その後も、各種会合や来校者に対し、リーフレットを広げ説明を繰り返してきた。挨拶の中で必ず触れるようにした。学校だよりやホームページへの掲載、体育館の教育目標掲示など、常に教育目標が、保護者、地域の目に触れるようにした。

保護者の評価	A	B	C	D
○ 教育目標「ひとりで みんなと さらに」を知っていますか。	44	46	8	2
○ 「ひとりで みんなと さらに」はよいと思いますか。	45	51	3	1
○ 「ひとりで みんなと さらに」が、子どもの姿に現れていますか。	7	59	32	2

〈平成18年度1学期〉 A (とても) B (だいたい) C (あまり) D (よくない) 数値〈%〉

表3 保護者の教育目標評価

保護者が、教育目標に大変高い認知度を示している。また、高い肯定感を示しているのは、教育目標改定のリーダーシップを取ってきた者として心強い。今後は、PTAの活動目標を教育目標とリンクするなど、保護者、地域との連携を図っていきたい。

5 考察

教育目標が、内と外に開かれた学校づくりに寄与するものになったか、観点ごとにその成果を検証、考察する。

(1) 教育目標を、関連する目標とリンクさせて、機能的なものにしていく。

教育目標と重点目標、重点目標達成の視点、教育活動目標が、「ひとりで みんなと さらに—自立 共生 挑戦—」で統一された。「ひとりで—自立—」は抽象的であるが、重点目標「自ら学び、自分の考えのもてる子」で子ども像を示し、重点目標達成の視点「一人一人の学力の保障」と具体的な教育活動の実施で、目標達成を機能的なものにすることができた。

学年目標、教科や各種教育の目標、各種起案のねらいも、すべて「自立 共生 挑戦」で統一された。学校のすべての目標が統一されたと言っても過言ではない。これにより、教師は、計画や起案を同一認識のもとで立てることができ、指導に向けて互いの共通理解が容易となった。教師全員が共通理解している目標システムは、どんな成果があり、今何が課題なのかを理解しやすく、事後の指導に生かすことを容易にした。教育目標が、内(教師)に開かれたものになっていると考える。

(2) 教育目標を、各種教育活動とリンクさせて、具体的、実践的なものにしていく。

グランドデザインに示された教育活動に、重点的に取り組んできている。「みんなと—共生—」の重点目標達成の視点は、「人とのかかわりの育成」である。具体的な教育活動として、「学級人間関係調査の実施と分析」など4点に焦点を当てた。「学級生活に満足している児童80%以上」が数値目標であるが、アンケート結果では、「とてもよい」、「だいたいよい」を合わせた教師評価が80%、保護者が93%、児童本人の評価は91%に達している(表1)。ただ、



図1 ロンランプラン2005の一部

この数字に甘んじることなく、人間関係の把握や教育相談を行っていくことが必要と考える。日々多忙ではあるが、16項目の教育活動を推進し、評価していけば、自ずと教育目標の達成に結びつくと考える。

学年経営も、学校経営と同一のPDCAサイクルで行っているため、学校経営に準じて経営を行えばよく、教育活動の設定や評価が容易である。形式が同じため他学年とも比較ができ、自分の学年を客観的に把握することができる。

評価項目を保護者、教師、児童で統一したため、評価の手順や作業が容易となった。評価内容を、グランドデザインで示した16項目の教育活動で行うことを保護者にも共通理解を図ってきたため、外から学校を見ている保護者も、アンケートに答えやすかったはずである。

目の前の活動に対して教育目標の何を頑張ればよいのかを意識させることにより、児童の活動意欲の高まりを感じた。教育目標について児童アンケートを実施したところ、多くの活動で「みんなと」を意識し、「仲間を大切にしたい」、「友だちと仲よくなりたい」という思いが高いことが分かった。教育目標が、内（児童・教師）と外（保護者）に開かれたものになっていると考える。

(3) 教育目標を、自分のこととして、全教師がかかわるものにしていく。

教育目標への肯定感の高さを、教師アンケートで得ることができた（表2）。「さらに一挑戦」の重点目標達成の視点は、「チャレンジ精神の高揚」である。17年度の数値をもとに18年度の教育活動の選定や目標とする数値の策定に熱心な協議がなされた。17年度は「チャレンジカードの充実」という運動を奨励するカードの充実に焦点を当てた。それに対して、運動や授業などもっと多面的な学習カードに焦点を当て、児童の学習意欲を引き出したいという教師の声が高まり、18年度は「学習カードの活用」に改善された。1年間児童とかかわってきた教師の指導が、声となって現れたものと考ええる。

今後、教師全員が共通理解し、学級担任として学級の指導を、学年主任として学年の経営を、各種主任として行事の起案と運営を通して教育目標とかかわってほしいと願っている。そのことが、全員で学校経営を行っていくことにつながる。教師が教育目標を肯定的にとらえ、改善に積極的にかかわり、さらに内（教師）に開かれたものになってほしいと考える。

(4) 教育目標を、広報活動を工夫して、保護者、地域が広く認知できるものにしていく。

教育目標の認知度、肯定感の高さを、保護者アンケートから得ることができた（表3）。自由記述の中にも、「わかりやすい言葉でよい」、「家庭でも、『ひとりで みんなと さらに』を合い言葉としていきたい」などの評価を得ている。ただ、教育目標が児童の姿に色濃く現れてはいないという評価もあり、今後時間をかけて指導していかなければならない。

保護者アンケートで、家庭や地域での子どもたちの頑張る姿を調査した。宿題、手伝い、スポーツ活動、地域行事（育成会活動）などが上位に挙がっている。「ひとりで」には宿題や手伝いが、「みんなと」には地域行事が、「さらに」にはスポーツ活動が当てはまる。保護者が、「自立 共生 挑戦」を必然的に家庭教育の中でも実践しているととらえる。

地域からの評価は、学校評議員や後援会から意見を聞く程度に止まっている。直接学校とかかわっていない地域の方からも、教育目標そのものについて、また、児童の姿にそれが現れているかどうか聞きたいところである。保護者や地域への教育目標の啓発を今後も行い、さらに教育目標が、外（保護者・地域）に開かれたものになってほしいと考える。

6 おわりに

これまでの勤務校では、教育目標はどちらかと言えばあるだけで、教育活動とリンクしていなかったことを反省している。この2年間、教育目標「ひとりで みんなと さらに—自立 共生 挑戦—」を設定したことによって、教育目標を中心に教育活動がスムーズに流れていることを実感している。

教育目標は、目標の改定で終わりではない。むしろスタート地点に立ったと認識している。校長として、改定に注いだリーダーシップを教育目標の達成に向けても発揮し、「ひとりで みんなと さらに—自立 共生 挑戦—」の姿が、児童の中にさらに現れるよう学校経営を推進していきたい。

参考・引用文献

奥田眞丈他 新学校教育全集1「教育目標」, ぎょうせい, 1994年, p.55, p.160

黒沢武美 「学校教育目標に関する若干の考察」『学校経営研究』, 1976年, p.52

新潟県教育委員会 「教員評価の手引き～教員の資質能力の向上と学校生活の活性化に向けて」, 2006年